



定期テストの時に、で、理論からやり始めて有機も夏休み中にやって。新演習(三省堂)も平衡と酸化還元あたりをちょっとだけかじって。過去問は直近5年ぐらいしか解かずに本番でした。本試験では努力がひねり潰された感じの問題で。何だこれって思いながら解いていました。知識を使うんじゃなくて、地頭を問われるような問題ばかりだったので僕にとっては不本意な感じでした。

逆に物理はできた自信があります。まだ得点開示を見ていないので、分からないですけど、化学の分を物理で取り返せたのかなと思っています。

## 合格の可能性が見えた瞬間はありましたか。

**南:** 8月の京大実戦模試ではE判定だったんです。数学で30点とかすごいことになって(笑)。でも、11月の京大オープン模試ではB判定で。その結果を見た時は舞い上がってました。いけるかもみたいな感じになって。でもそこから先はもうなんか波というか、いけるいけない、いけるいけない、みたいな時期がずっと続いてました。でもやっぱり数学が鍵になってくるので、もう冬以降は数学で勝ったら受かるし、負けたらおしまいって感覚でずっとやってました。

## 第二志望の学科での合格について、自分の将来のビジョンなどで迷うことはありませんでしたか。

※京都大学工学部は出願時に学科を第2志望まで選択することができる。

**南:** 中学の頃にロボットをやっていたのもあって、就職するとしたらまあITとか電気系とかかなっていうので、電気電子工学科が第一志望だったんですけど。でも、自分を納得させるための言い訳かもしれないですけど、興味があることは自分で勝手に学んだから、今は興味がないことを大学で強制的に学んだ方がためになるんじゃないかなと思っています。入ることになった地球工学科で気象システムの研究とかもできそうなので。何を土台にするのか、何の知識を学ぶかの違いだけで、結局何でもできるのかなっていうふうに、今は勝手に解釈してます。でも本試験を受ける前は迷ってました。もし第二志望で受かったら、他の大学の電子の方に進むかなっていうことも考えていたんですけど。でもやっぱり環境で選びました。京大にはおもしろい人が多いと思うので。高校でも周りの友達だちがめっちゃおもしろくて。恵まれた世代で、おもしろい友達も多くて、なんか変なネタで通じる仲で。そういう友達と京大の方が多く出

会えるのかなと思って。なので、できることは何でもあるんだからっていうので京大にした感じなんです。地球工学でも環境工学とか資源工学とかいろいろなコースもあるし、また学んでいくうちに僕の興味も変わっていくでしょうし。



## Academy Campusのことについて教えてください。

**南:** 吉田先生の授業(ACクラスライブ授業・英語)は、なんていうか信じるだけのものがあるって思います。上からみたいな言い方ですけど。先生は自分の知識に関してスラスラ出てくるというか…本を見ながらとかではなくて、完璧に中にあるというか。「はい、この形容詞を使うところはこれとこれとこれ。これは何番のこの用法だったよね」みたいな感じでスラスラと出てきて。あ、この先生は本当に分かっている人だっていうのが、授業の些細なところからも感じ取れて。「この人の授業なら」と思えました。普通に分かりやすいっていうのもあるし。あと教養の部分も。英文の内容だけじゃなくて、その奥にある「これスペイン系のこういう意味があったよね」とかいうのも詳しいので。僕、吉田先生の英語の授業を受けていて、現代文が得意になったところがあるんです。英語の授業を受けていて「あ、この接続詞があるから、もうここで対比になっている」という考え方が、国語でも「あ、これってこうやん」みたいな感じ使えて。そういうところからも、すごいなーって思いました。ただただ英語を教えるんじゃなくて、参考書とかに書いてない部分を教えてくれて。「ここここが対比だから」とか参考書に書いてないですし。やっぱり文法だけじゃなくてその先にあるところが大事で。実際に、京大の英語を読むためにはそういう教養だったり国語力が必要になってくるので。京大の問題は、英文の答えや和訳を見ても分からない、っていう内容がザラにある。そういう意味ではためになったし、本当に受けていてよかったなって思ってます。



教養という点では、寝る前にちょっと歴史系のYouTubeを見たりしていました。吉田先生おすすめのチャンネルとかも。あと、周りの環境が強かったってものがあります。学校のカリキュラムでも生物と世界史を取って。入試に不要な科目を受けないといけないことに不満がある人もいると思うんですけど、僕は取ってよかったなって思います。ちょうど今年の京大の英文がメソポタミア文明の話と、空気中の細菌のDNAを調べようみたいな文章だったんです。いらないって思っても、それが教養として身につくわけで、受けててよかったなって。あと、友達に歴史好きのやつとか、生物好きの人も多いですし。「これ、この鉱石はね」みたいな感じで話す友達が周りにいるっていうのも、すごいアドバンテージだったのかなって思ってます。結局テストのためではなくて、自分のものになっていくし。

あと、長沼先生(ACクラスライブ授業・国語)から教わったことで一番でかいのは「共テの国語は情報処理能力が必要」ってことだと思っています。国語って自分の中の認識では、筆者の思うところを推測しにいくか、筆者がどう思ってるかをもう必死に自分が考えて書くってイメージだったんですけど。そうではなくて「この文脈から考えて一番合理的に考えて適当な考え・答えを導くっていうゲームだったんだな」って気づけたのが一番大きいです。共通テストってやっぱり時間との勝負なところがあるので。長沼先生のやり方は「ここに線引っ張って、ここに線引っ張って。で、ここ。」みたいな感じ。最初は「本当に役に立つのか」とか「共テのためだけの勉強」ってイメージだったんですけど、でも結局、それも巡り巡って、二次試験でも選択肢が記述式になっただけで考え方は似てるなりました。

岡先生との面談は、学校の先生とはまた違うセカンドオピニオンの感じで相談させていただいてました。ネットの意見ってやっぱり平均値なので、僕に当てはまってないなっていうのは感じて。その中で、僕の状況を聞いて答えてくれるっていうのはすごい心強かったです。高校受験はなかったし、中学受験の記憶なんてあんまりなくて、実質初めての受験なので。ペース配分とかが全然わからなくて。そういう意味では、本当にペースメーカー的な感じがありがたかったです。

## 受験生活を振り返って。

南： 受験って自己マネジメント、自己管理能力が試されてるなって。なので、受験生活でよかったこととしては、ありきたりですけど、計画を立てる力みたいなのが身についたなと思います。逆にしんどかったところっていうのは多く語れます(笑)。高3の夏ぐらいに勉強する意味が分からなくなって病んでた時期があって。「なんでいい大学に入りたんだらうって考えた時、いい友達がいそうとかいい環境がありそうって思って。じゃあいい環境があって次は何をしたいのか、せっかくいい大学に入ったんだから、いい会社に入らないと、みたいな感じになるよな。じゃあまたそこから就職戦争が始まって。それでいい会社に入ったら、次はいい地位を目指し始めるんだらうな。じゃあ次は地位バトルが始まるのか…あれ、僕はいつ幸せになるんやろう。」みたいな感じの問いが始まって。で、問いを立てていくうちになんかもう、なんで生きているのかみたいな病みループに入り。病んでしまったら勉強できない、勉強できなくなったらなんでこんなことしてんのってまた病み。っていう無限ループ、悪循環に陥ったことがあったんです。で、そこから抜け出すには、ある種の狂気みたいなものが必要だと思って。「京大は神だ、京大に入らないと！俺は京大行くんだ！」っていうそういう暗示もある意味必要なのかなって。それか、絶対的な目標。僕はある意味ふわっとしたような感じだったので。友達だと「この研究室に行きたい」とかがあって、そういう目標を持っておくのって本当に大事だなって痛感しました。まあ、僕の場合は、暗示で。「もう俺はここに行くんだ」って。あと、現実逃避の依存先を見つけることをしました。好きなアーティスト作って、それを聴くようにしてました。依存先を作るといふか出会うといふか、中間ぐらいの感じで。でもたぶん受験生はみんな勝手に自己暗示してると思う。それが大人になっても解けなくなっていったら「学歴厨」とか言われるようになると思うんですけど。でもやっぱり受験生のうちは「学歴厨」にならないといけないのかなっていうのは思いました。

## 後輩へのメッセージをお願いします。

南： 大学受験は、正直過酷だと思うんです。僕はたまたま受かったけど、絶対に努力したのに落ちてしまった層がいるし。僕はどっちかっていうと努力してないのに受かった側だと思うんです、どちらかという。端から見たら努力してたのかもしれないですけど。でもやっぱり受験期間は一旦頑張った方がいいんじゃないかなと思います。この期間はその受かるための期間じゃなくて、自分を試す期間だと思って。どこまでできるのかっていう気持ちでやってみたらちょっと楽になるんじゃないかなって、思ったり思わなかったり(笑)みたいな感じですよ。



## インタビューを終えて

京都大学合格おめでとう。

南君は高3生の面談時、必ず自分が聞くべきことをメモして準備し、「このやり方で合っていますか？」「この時期までに終わらせればいいですか？」と、自分の考えを確認する場として面談を活用してくれていました。面談のたびに、さすがだなと感じていたことをよく覚えています。

インタビューで特に印象に残ったのは、「受験に必要なことからやらない」ではなく、「いつかどこかで役に立つかもしれない」という視点で物事に向き合っていたこと。また、動画で知性や教養につながるものを積極的に観ていたことなど、その重要性を理解し、主体的に取り組んでいた点です。そして、それらが京都大学の入



試にも影響したという話は、本当に素晴らしいと思いました。

京都大学では、個性あふれる多くの人たちとの出会いがあるはずです。その中で南君自身も個性を磨き、感性を育て、さらに大きく成長していくことでしょう。憧れの京都大学での学生生活を、思いきり楽しんでください！